

江戸川区教育委員会教育長
蓮沼 千秋殿

「都立高校入試へのスピーキングテスト導入の延期および再検討に関する陳情」

陳情要旨

東京都教育委員会は民間事業者と協定を結び、令和5年度都立高校入試においてスピーキングテストの導入を計画しています。しかしながら、導入に関しては以下のようにさまざまな懸念が指摘されています。

1. 東京都中学校英語スピーキングテスト事業（以下、ESAT-J）は、生徒・保護者・学校・都民に十分に周知されておらず、進路に関わる入試制度の変更に不安感、焦燥感をあおることになると危惧されてきました。実際に、Web登録にあたり、生徒・保護者は個人情報をも民間企業に提出させられることへの不安を抱き、不登校生徒は受験・不受験を決断することを迫られ、困惑するなど、中学校現場では混乱が起きています。

2. ESAT-Jは20点満点で総合点に組み入れられますが、これは調査書における1教科分（約23点満点）の換算点とほぼ同じであり、英語の内申点と合わせると約43点となり、国・社・数・理の調査書点の2倍にあたります。入試選抜における教科配点として非常にバランスが悪く、中学校の学習指導への影響が出ることが予想されます。

3. 不受験者には、見込み点が与えられ、その算出には同じ学力検査得点の前後概ね10人の生徒のESAT-Jの平均値が使われます。この方法には専門家からも疑義がでています。一点を争う入試には見込み点は適当ではありません。

4. ESAT-Jの問題内容は、ベネッセによるGTEC Coreと酷似しています。指示文、問題構成、問題数、解答時間までほぼ同じであり、受験経験の有無が、有利不利を生みます。このGTEC Coreを自治体として実施する区市町村は約2割で、江戸川区では実施していません。最初から不公平な状態で出発している点は看過できません。

5. ESAT-Jの結果返却は1月中旬ですが、最大20点の幅がある結果が返却されれば、志望校の変更を考える生徒・保護者も出て、混乱を招くことが予想されます。中学3年担当教員の入試実務はさらに過酷を極めることになります。この混乱は、生徒・保護者の、学校ひいては東京都政への信頼を失わせることにつながることを懸念されます。

6. ESAT-Jは、タブレットに向かって一方的に話す形態をとりますが、本来のコミュニケーションのあり方とはかけはなれています。入試合格へのモチベーションは上がっても、英語学習へのモチベーションにはつながりません。さらに、定型的なやりとりを暗記しても実際には英語が使えるようにはならないと専門家も指摘しています。テストに対応しようとすれば、本来の豊かな英語学習の時間が削られることが懸念されます。

7. ESAT-Jは東京都のグローバル人材育成の方針にのっとっていると言われますが、中学校で育成すべきなのは、一部のグローバル人材の育成ではなく、すべての生徒がグローバルでローカルな視点を持つ市民ではないでしょうか。

「話す力」の育成は、総合的な基礎力の上に成立するものであり、早急に育成されるものではありません。それを中学3年の11月末に一定程度、完成させるというスケジュールには無理があります。

8. 現在、中学校の英語授業は、高度化した教科書を従来の授業時数で学び、40人の学級定員で、教師の持ち時間も20時間近い中で行われています。コロナ禍も続く中、入試に活用されるアチーブメントテストの導入は、生徒・教師に新たな負担を強いるものになっています。入試で授業を変えることを強いるのではなく、英語教師の裁量と工夫を活かし、英語力と異文化コミュニケーションの力を向上させる施策への変更を現場の教師は望んでいます。

以上、8点の理由により、ESAT-Jの入試への導入の延期および再検討を求めます。

つきましては、区教育委員会において、本スピーキングテストの入試への導入の延期および再検討を東京都教育委員会に求めるよう、陳情いたします。